

石碑と大ケヤキが語る大久保のルーツ!

■ 開発の先がけ 倉島家

大久保の神明社境内に「開発二百七十六年記念」の石碑が建っています。大久保集落（大久保新田）の創立から276年を記念して、1934（昭和9）年に建立された貴重な資料です。

開発の先がけは大久保の倉島家です。もともと、加賀国（石川県）の大聖寺藩士でしたが、いつの頃からか浪々の身になり、太子堂村に居住していました。2代目の半之丞が、1652（承応元）年、新発田藩に新田開発を願い出るとともに、1654（承応3）年には、開発の成就を祈願して神明社を建立しました。

1657（明暦3年）、大久保、縄内などの田3町歩（ha）、畑10町歩の開発免状が半之丞に与えられ、新田の開発が始まりました。そして、1659（万治2）年に大久保新田の村号が許され、半之丞は、

肝煎役（名主）を仰せ付けられて、屋敷畑2反（約0.2ha）を拝領しています。

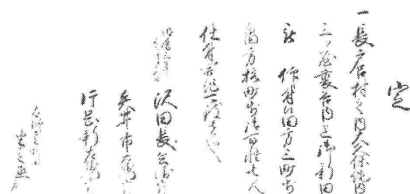
■ 大ケヤキが見守り続けた開発

その後、1731（享保16）年の阿賀野川の松ヶ崎本流化による干上がり地の開発や1734（享保19）年の新江用水路の開削などにより耕地は増加しました。1742（寛保2）年までに、田が約24町（ha）、畑が約36町、合わせて約60町が開墾されました。この耕地面積は、明治に至るまで、ほぼ同じ状態でした。

石碑の脇には、樹勢盛んな「大久保の大ケヤキ」が立っています。市指定の天然記念物で、北区では「高森の大ケヤキ」に次ぐ大きさで、推定樹齢300年、目通り5.9m、高さは約25mです。石碑とともに、大久保の歴史を物語る大樹です。



「開発二百七十六年記念」の石碑



1657（明暦3）年の大久保新田開発免状



大久保の大ケヤキと神明社